

SQiP2009 企画セッション2
レビューの壁を破る
会場からの意見・コメントのまとめ

ソフトウェアレビューの議論ができるメーリングリストを作りましたので、続きはそこで。

参加方法は<http://se.aist-nara.ac.jp/html/review/ml.html>

2009年9月10日

セッションリーダー: 森崎 修司(奈良先端科学技術大学院大学)

まとめ/記録: 安達 賢二(HBA)

司会: 野中 誠(東洋大学)

事前調査結果の抜粋

<典型的な課題>

- 時間がかかる・効率が悪い
- 参加メンバーのレベルが不ぞろい
- 知識、経験共有するしくみがない
- 人によりコード等の書き方が異なる
- レビューの効果が不明瞭

<個別コメント>

- レビューする暇がない
- レビューするに値しない成果物も多い
- がんばってレビューしてもその評価がない
- 対象ドメインの有識者不足

ソフトウェアレビューの課題1

- “ざるレビュー”になっていることがある。
レビューを実施しても、エラーが残ったまま
- 実施チェックができない。
「サーバに成果物案を置き見ておいてね」→ 指摘がなければ問題なし(実際には見られていない)。
- 設計漏れなど同じようなレビュー指摘が複数のプロジェクトで発生しているが、包括的な対策がない。
- 開発完了後の事後分析で「これはレビューでしか検出できない」という結論になる。
→再発防止策として「レビューをしっかりとやります！」
→それでも再発した場合には、「今度から有識者がやります」

ソフトウェアレビューの課題2

- レビューの質を問わない。
なんでもレビュー、レビュー実施時間が10数分など短い場合もある
- 形骸化
読み合わせしているだけ
- 生産性が低い
人を沢山投入しても欠陥指摘が少ない。
- レビューのインプットが不明確。
- レビュー指摘に沿って修正できていないことがある。
(バグ修正はトレースするのに。。)
→レビューの修正のプロセスとはどうあるべきか

ソフトウェアレビューの課題3

- 知見が横展開されない
プロジェクト終了後に問題分析を行う。
→ チェックリストを作成する。
→ 別プロジェクト、別メンバーではそのチェックリストは使われないことが多い。
- プロセス、技法が不明確
どの場面でどのようなレビュー形式を採用したらよいのかを明確化していきたい。インスペクションを採用するのはよいことだが、採用できるほど工数を持っていない場合も多いので、選択肢、リスクとリソースに応じた選択基準を策定することが必要になりそう。

ソフトウェアレビューの課題4

- 不具合発生後のなぜなぜ分析→レビューをやる・知識不足をどのように補完するのが課題になっている
- レビュー指標: 上限値・下限値はあるが、当てはまらないことも多い
→ 当てはまらない場合の理由はいちおう記録するが意味のあることなのか？
- どこまでやればよいか目安がない。
レビュー時間の目安は？
- 「レビューをしっかりとやる」とだけ決められているが、どのようにやるのかは未定義。

ソフトウェアレビューの課題5

- 事前に自身で見直し(自己レビュー)をやっていない
誤字脱字が多い成果物案も多い。どのくらいどのように
自己レビューしてもらうのか?なかなか説得できない。
やらない人、やれない人いろいろいる。
- (開発全体としての)開発プロセスにレビューが組込まれ
ていない。
外部委託した成果物案のレビューをする際に機能面で
の問題が見つけにくい。これらはテストで検出すること
になっている。
- 指摘が本質的でない
すぐ目につくところだけレビューする、と考える傾向があ
る。

ソフトウェアレビューの課題6

- プロジェクト計画にレビューがない。
- レビューの進め方がおかしい。
- レビューで抜け・漏れが指摘しにくい。
バグ分析の結果、本来必要な作業が抜けていることが分かるような場合が多い。
- 仕様や設計の記載の仕方の問題がある。
- 機能定義の誤り等よりも機能の存在自体が・・・
製品として本当に必要な機能なのか疑問なものもある。
- チェックリストが数100件。全部やるのか。。

全ページまでのサマリ

1. プロセスが定義されていない
2. スケジュールが取れない
3. レビューで頑張る、ちゃんとやる問題(でもどうやって?)
4. 過去の失敗が共有できない
5. チェックリストの形骸化
6. レビューの十分性確認
7. 適切なレビュー技法の採用基準
8. レビュー対象物の書式、記載内容、記載方法
9. 直せない、致命的指摘事項

課題解決にむけた議論1

(先頭の数字は9ページ目の課題番号)

- 1・2-プロジェクト計画、スケジュールにレビューを組み込む
- 3-レビューア指定時にそれぞれのレビューアに異なる観点を設定することで集中力を維持できるようにする。(シナリオベースストーリーディングに類似)
- 3-レビューの実施効果があると分かることが重要。また“ほめる”等が大事。

課題解決にむけた議論2

(先頭の数字は9ページ目の課題番号)

- 4ーチェックリストに過去に起こったいやなことを記載しておく。
- 4ー経営的問題にまで発展したエラーは、社内ビデオで公開して見せるなど忘れさせないようにする。また、教育場面でメンバーにどうしてこういう確認を取るのか、どのような品質が要求されているのか、などを伝承していくことが必要なのではないか。

課題解決にむけた議論3

(先頭の数字は9ページ目の課題番号)

- 5ーチェックリストがあると、その項目しか見ないことがあった。まずはチェックリストなしでレビューしてからチェックリストベースで最終確認する。
- 5ー一年1回チェックリストを全面見直し。追加要望、役に立つものたたないものを明確化するなど、チェックリストのメンテナンスも必要。
- 5ー何のためのチェック項目なのかをチェックリストに付与する。(例:過去のクレーム情報を右側に補記)
- 6ー重要欠陥、軽微欠陥、参加者、時間などでレビューの十分性を判断するのは限界がある。しかし持っている情報で判断をしたい。数字情報では判断できないときがあると認識しておく。

課題解決にむけた議論4

(先頭の数字は9ページ目の課題番号)

- 6-数・量で十分性を判断できるわけではない。数合わせ、言い訳が増える。目安として使いつつ、レビューポイントを確認できたか、レビュー目標を達成できたかが中心でよいのでは？ 実施時間は2時間程度まで。
- 6-どういう点をどのように確認したのかが残らない→残すようにする。その情報で十分性を確認する。
- 6-欠陥を早く見つけるとよい。修正工数を測って効果を共有する。

課題解決にむけた議論5

(先頭の数字は9ページ目の課題番号)

- 6ー記載内容に対して“なぜそういう記載？”を問い合わせて確認する方法で実施している。
- 7ー成果物の難易度や担当者のスキルでリスクレベルを設定し、レベルごとにレビュー実施方法を変える
- 7ー同僚レビューを中心に使う。
- 8ー設計者同士で対象ドキュメントを交換してチェック。誤字脱字がなくなるまでこれを続け、なくなった時点でレビューを実施。自己レビューをしない人にも効果的。